Summer program に参加して

名古屋大学医学部３年　横田彩名

2026 年 7 月 7 日から 13 日までの 1 週間、Summer program に参加させていただきました。このプログラムには名古屋大学の学生 13 名と海外協定校からの留学生 9 名が参加し、日本の在宅医療、地域医療の現在と未来について多くのディスカッションやグループワーク、研究室見学などを通して学ぶとともに、美濃地方の散策や鵜飼、週末の犬山訪問などのさまざまな文化体験を行い、とても貴重で有意義な、幸せな時間を過ごさせていただきました。

1. 総合診療科への訪問

名古屋大学附属病院総合診療科の髙橋徳幸先生を訪ねる機会をいただき、buddy とともにお話を伺いました。先生は名大病院で膠原病などの複雑な疾患に病名をつける診断医として週に２回勤務されるとともに週の半分は訪問診療をし、さらに医学教育にも精力的に取り組まれています。日本は今超高齢社会に突入していますが、患者と医師、急性期病床の都市部への一極集中や地域医療、在宅医療に関する需要と供給の不均衡など、多くの問題に直面しています。先生との対話を通して、先生が担われている多様な役割について知ることができたとともに、今後日本がさらに多くの総合診療医を育てていかなければならない差し迫った理由と、それを実現するために現在導入されている政治的な仕組み（在宅医療に対する診療報酬の引き上げなど）について学ぶことができました。患者さんを診療科の間でたらい回しにすることなく責任を持って診ることができるような、総合的な視点を持った医師を目指したいという思いが強まりましたし、総合診療医への興味もさらに増しました。

2. 総合在宅医療クリニック かがやきへの訪問

かがやきは 2009 年に岐阜県初の在宅医療専門クリニックとして開業され、市橋亮一先生をはじめとした医師・看護師だけでなく音楽療法士、管理栄養士、歯科衛生士などの多職種がチームとなって連携し、岐阜、美濃、名古屋の在宅医療に取り組んでいます。単なる医療提供としての役割にとどまらず、地域のさまざまな活動や交流の拠点にしたいという思いから作られた「かがやきロッジ」の他に、「かがやきキャンプ」と呼ばれる医療的ケア児のための短期入所施設も併設し、子どもたちの食べる力、寝る力、遊ぶ力を養っています。

在宅医療は、人々の QOL を維持したまま医療を提供できる素敵な存在だと思います。入院、リハビリを経て自宅に戻る場合、どうしても一旦今までの生活は失われてしまい、それを機に自宅ではなく介護施設への入居を余儀なくされることも多いですが、在宅医療なら今までの生活、今までの環境、今までの人間関係を維持することができます。生きる

ために生きるのではなく、自分らしい生きがいを持って生きていくことに大きく貢献出来る存在が在宅医療であり、この在り方に私はとても感銘を受けました。

たとえばかがやきが中心となって行っている取り組みの一つに、地域の人を集めて車椅子の人とそうでない人が一緒になってモーニングを食べにいく取り組みがあるそうです。自宅にいながら医療を受けられるのはもちろん地域医療の良さですが、このように今まで暮らしてきて、これからも暮らしていくであろう地域に溶け込んだ生活を途切れさせないこと、自分も地域の一員だと感じながら、人々との繋がりや交流を絶やさず維持して生きていけることが患者さんの生きがいになっていて、地域医療はこのような患者さんの生きがいを生み出す源の一つとして大きく貢献しているのだと感じることができました。

さらにかがやきキャンプでもとても素敵なものを見せていただきました。ここには医療的ケア児のためにさまざまな工夫が施されたプールが用意されており、このプールを目的に全国からご家族がやってくるそうです。デジタルアートとセンサーを組み合わせ、壁に水をかけると水の中から魚が飛び出してくる仕組みがとても可愛らしかったです。

3. カムカムスワローへの訪問

カムカムスワローは、食を通して地域の人々の健康を支えるだけでなく、地域の交流の場として人と人とのつながりを育みたいというコンセプトのもと作られた、嚥下障害や食、栄養全般に関する相談窓口やカフェなどからなる施設です。私は食べることが大好きで、食が人生のこだわりの中心にあるような人間だからこそ、カムカムスワローのコンセプトにとても魅了されました。実際嚥下障害のある方に提供される食事を体験させていただきましたが、見た目も彩りも普通の食事のようで味も美味しく、食を通じて人々の QOL を支えていこうという思いの強さが感じられました。患者さんの生きがいは人それぞれ違うと思いますが、食に関連する生きがいをもつ方は特に多いのではないかと思います。生活に密着した部分から患者さんの生きがいを支えていけるような医療従事者に自分もなりたいと思いました。

4. グループワーク

多系統萎縮症（MSA）の患者さんについて、病態のみならず社会的、精神的な側面にも着目して議論し、何か追加で提供できる医療はないか考えました。MSA とは小脳、脳幹、大脳基底核など脳の複数の部位が徐々に変性していく進行性の神経難病です。初めて聞く病名でわからないことが多く、自分が持つ断片的な知識を総動員してなんとか議論を理解するという状態になってしまいましたが、活発に行われる議論を間近で見て留学生の知識の深さと積極性、プレゼン能力、論理性などあらゆる能力の高さにとても驚かされました。自分が目標にしたい姿が明確になり、とても有意義な時間を過ごすことができました。

5. 美濃地方の散策や週末の街歩き

地域の人々の地域に根差したマイクロハピネスに触れるため、浴衣を着て街歩きをしたり、鵜飼を見学したりしました。週末には一緒にしゃぶしゃぶを食べに行ったり犬山を訪問したりして、本当に楽しかったです。美濃地方では純粋に散策を楽しみすぎてしまい、正直マイクロハピネスについて考えるのを忘れていたのですが、週末栄を一緒に歩いていて気がついたことがあります。よく時間をともにした一人は歩いているときに、錦にある「錦にコイ」の看板や栄のオシャレなプロジェクションマッピングなど、上の方に掲げられた看板にいつも注目し、それを可愛いと言っていました。もう名古屋にも住み慣れた自分はすでにその感覚を失ってしまったなぁと気付かされつつ、その感性がとても素敵だと思いました。それを伝えると、下を向いて歩いていても景色が変わらなくてつまらないから、いつも上を向いてプリンセスの様に歩くようにしていると教えてくれました。美濃地方に行った時、地域の人が気づいていないマイクロハピネスを見つけようという話がありましたが、それはこのように、あらゆるものに目を向けて新たな魅力を発見することなのかもしれないと感じました。








AED

